

市民力かわら版



大震災から三年を迎えて 今できることは？

東日本大震災から丸三年。かわら版では、四十号を迎えた節目に、このテーマを取り上げ、震災直後から現在に至るまで、息の長い被災地支援ボランティア活動を行っている二人の市民の方に話を伺った。

そこからは、現地に行った者にはしか見えてこないさまざまな課題が垣間見える。

ボランティア風車

三年間を振り返って

代表 渡邊英子さん

●力仕事から心の支えへ

震災直後は、作業ボランティアとして、とにかく、ガレキの撤去や、泥だしの力仕事を黙々とやり、被災者と直接話をする機会はほとんどありませんでした。一年目で大きなガレキ処理は終わり、二年目は被災地の方と一緒に畑のガレキを撤去し復旧作業。三年目から私たちが行っている活動は、心の支えと自立支援のためのものへと変化してきました。(自称、「観光支援ボ



渡邊英子さん

ランティア」と呼んでいます。)「身近な人を亡くしている」「生活そのものがこわれている」など、被災地の方は、健康、家族、職場、友人など、生活する上での基本的なことを全て失っている人が多いのですが、そういった方の支えとは何かと考え続けています。

●観光支援ボランティアとして

震災直後は、声かけもままならない状況でしたが、少しずつ心にも余裕が出てきたよう、私たちも話の輪に入れるようになってきました。話すことで楽になるということかもしれません。

仮設住宅の方の生きる力と、精神的な支えになるよう、話を聞くことで「心」の支えに結びつくと思っています。

また、震災から少し落ち着いた頃、津波で店を流された

人たちが、仮設店舗(女川のおさかな市場など)での営業を始めました。しかし、復興が進むにつれ、ショッピングセンターなどが再開されたり、高速道路の無料化が終わったことで、ボランティアの数も観光客も減り、客足が激減しました。

そんな被災地の方たちに、もう一度元気になって欲しいと願って行っているのが、「観光支援ボランティア」で、被災者の方と触れ合い、現状



仮設店舗での営業。少しさみしい。

を見てもらい、ついでに買い物でお金を落とすというバスツアーを実施(月一回二十人程度、参加費四千元)しています。そのほかにも、二十五年度は矢板市内の小・中学生や、さくら市のグループホームの皆さんと風車のメンバード、百キログラムの種イモを植えて、育て、収穫し、それを手渡しで一軒一軒配り、喜んで頂く事ができました。

●今、被災者が一番伝えたいこと

「私たちのことを忘れて欲しくない」「まだまだ厳しい現状を知って欲しい」ということのような気がします。

また、「たくさんの人が来てくれることが私たちの力になっていく。もっともっと来てくだささい」という声をたくさんいただきました。

●少しでも多くの方の参加をお待ちしています

ボランティア精神が人と人の絆を生み、コミュニティともつながり、自分たちのまを元気にするものにもなるのではないのでしょうか？

たいしたことはできなくても、現地に行き交流したり、現状を見てくれるだけでいいと思います。ぜひ気軽に参加していただければと思います。

(M・W)